

自己評価報告書(最終報告)

報告者

特別支援教育専攻／井上
とも子

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

①授業内容:大学院生(現職教員)に発達障害児の指導のあり方及び、指導方法を実際の指導を通して、身につかせ実践力を高める。概論等の授業では協議形式による問題解決学習を中心に進める。学部生の授業に関しては、常に学生自ら考え、支援方法を模索させることを授業の中心に置く。
②授業方法:大学院の教育臨床的授業は、幼児とその保護者の協力を得て、いわゆる「通級による指導」を体験させる。個別の教育支援計画から、毎回の指導案づくり、実践、動画記録の振り返り(ミーティング)等の週毎のPDCAサイクルに則った体験的授業を展開する。概論等は、週毎の課題を与え、予習することによって、授業の中で課題に関する協議と、学校現場の課題や問題点を取り上げた補足的講義で構成する。学部生の授業方法は、講義、グループによるテーマ別の課題解決及び発表、グループ別の相談シミュレーションを行う。
③成績評価
大学院では、PDCAサイクルの中で、積極的に取り組めたかを見極め、指導計画の立案と、その具現化(実践)の力量を個の変化によって見極める。概論等においても、協議の際のテーマの掘り下げの力、新しい視点を見極め、「子ども」を中心にした教育のあり方を考えることができるか、そこへの気づきと変化を評価する。学部生の授業においては、出席日数、試験、グループ発表の結果を評価する。発表の評価は、特に積極性、主体性に視点を当てて評価する。

2. 点検・評価

①②授業内容と方法について:大学院生(現職教員)に対して、教育臨床的事業の中で、発達障害児の指導のあり方及び、指導方法を学ばせることができ、教育実践力を養うことができた。概論等の授業ではテーマに沿って調べてきたことをまとめ、プレゼンテーションしながら協議し、特別支援教育コーディネーターの役割や、校内支援に関する知識を深めると共に協議の中で、新たな自身の問題をつかむなど、積極的に授業に臨んでいた。この授業内容は、学校現場に戻った際、校内の特別支援教育推進に役立つ知識と共に、子どもを中心に置いた支援のあり方に気づかせることができたと考えた。後期の「社会資源開発連携運用論」では、事例検討会の開催の仕方にも、踏み込み、校内の特別支援教育推進のリーダーとして、また、地域のリーダーとしても実践力を高める授業展開を図った。学部生の授業に関しては、常に学生自ら考え、支援方法を模索させることを目標とし、グループで話し合ったり、発表をさせた。発表や話し合いには熱心に取り組んでいたが、試験の結果からは、基本的な致死の習得が不十分である結果が見られ、充分には主体的に取り組んだ後が見受けられなかった。今後、授業方法の改善を諮る必要がある。
③成績評価
大学院では、PDCAサイクルの中で、積極的に取り組めたかを見極め、指導計画の立案と、その具現化(実践)の力量に関して、学生の授業評価において、現場で生かせる内容であったとの記述にあるように、実践力につながる内容を提供できた。概論等においても、協議の際のテーマの掘り下げの力、新しい視点を見極め、「子ども」を中心にした教育のあり方を考えることができるようになっており、発言や調べ方、レポート内容から気づきと変化を評価することができた。学部生の授業においては、出席日数、試験、グループ発表の結果を評価できた。発表の評価は、特に積極性、主体性に視点を当てて評価した。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

・発達障害児教育及び指導法という専門性を生かし、発達障害やそれを疑われる学生の支援ニーズを把握し、具体的な支援が行えるよう努力する。
・学部生・院生一人ひとりの学ぶ意欲や関心を引き出し、卒業論文・修士論文の作成まで、研究の成취に向け、専攻内全体を俯瞰する中で、指導教員と協力し、対応に尽力する。また、生活面にも気を配り、安全で安心な大学生活がおくれるように気を配る。

計画

①専攻内院生や学部専修生について、教務補佐や学年担任と協力の上、簡易連絡網等で連絡を密に行い、学業・生活面合わせて支援する。

②臨床心理士養成コースの先生方と連携し、具体的な支援体制や方法を探り、具体化に取り組む。

2. 点検・評価

①専攻内院生や学部専修生について、教務補佐や学年担任と協力の上、簡易連絡網等で連絡を密に行い、学業・生活面合わせて支援できた。特に、院生と同じ部屋のパソコンなどを使いながら、教育実習中など、現職教員の助言が仰げるように橋渡しをするなど、きめ細かく対応した。

②臨床心理士養成コースの先生方と連携し、発達障害学生支援の「総合的なコミュニケーションセンター」設立にむけ、意見書を提出するなど、学生課と協力体制で臨んだが、大学全体に充分アピールすることができず、途中の段階で企画が止まっている状態となっている。本学にも約1割の学生に軽度といえども発達障害を有する者がいると推察され、このセンター設立に向けて尽力したい。

③ストーカー行為を受けた学生や教員がおり、相談員としても専攻長・指導教員としても話を聞き、学生課や人事課とも協力体制を敷いて、その対応に当たった。学生課の積極的な対応もあり、事件事故につながることなく、事なきを得ている。

II-2. 研究

1. 目標・計画

・新たに申請した科学研究費が受諾される如何に関わらず、これまで継続してきた高機能発達障害幼児の就学前指導教室において、その指導のあり方、地域支援のあり方をテーマに、研究を進める。
・発達障害幼児の保護者に対する支援のあり方を就学前指導教室に参加した保護者のアンケートから検討する。
・院生や県内の教員等と協力し、新しい教育のあり方等、学校で発表し、発達障害教育の指導法等について提言する。

計画

①この研究は、これまで数年間地道に実践を続けてきており、動画映像の分析を進める。

②これまで採ってきたアンケートの集計および分析を進め、紀要等に投稿する

③諸学会大会において発表を行う。

2. 点検・評価

①この研究は、これまで数年間地道に実践を続けてきており、動画映像の分析を進め、継続中である。

②これまで採ってきたアンケートの集計および分析を進め、学内の学術研究発表会において、「発達障害用事の就学前指導場面を活用した保護者支援のあり方に関する一考察」と題して発表し、学校教育学会学会誌に投稿した。

③修了生と共同発表し、自主シンポジウムの指定論者となるなど、諸学会に大会に積極的に参加し、見聞を広めた。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

・専攻の代表として専攻内を取りまとめながら、様々な専攻業務の滞りない遂行に努め、学生の指導・支援に支障を及ぼさないように、また、大学の一組織として専攻が機能するよう努める。
・県内の市町村長への案内配付、ならびに、県内外の講演講師の招聘に応じ、本学や専攻の受験を案内するなど、特別支援教育コーディネーター養成分野のみならず、大学院及び、専攻の周知を諮る。
・「地域に根ざす教育支援人材の育成プログラム開発と視覚認証システムの実践的共同開発」のプロジェクトの法人化に伴い、その活動に継続的に参画する。

2. 点検・評価

・専攻の代表として専攻内を取りまとめ、滞りなく、専攻内業務を進めた。専修4年生の進路先も決まり、支障無く学生支援も進めることができた。
・県内の市町村長への大学院入試案内配付、ならびに、県内外の講演講師の招聘に応じ、本学や専攻の受験を案内するなど、特別支援教育コーディネーター養成分野のみならず、大学院及び、専攻の周知を諮った。
・「地域に根ざす教育支援人材の育成プログラム開発と視覚認証システムの実践的共同開発」のプロジェクトの法人化に伴い、その活動に継続的に参画した。
・徳島市教育委員会が中心となった四国内町村教育長会において、特別支援教育に関する講演をし、早期からの特別支援教育の重要性と同時に、本学での現職教員の資質向上のための大学院教育の必要性を訴え、大学院入試の案内をした。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

目標

・附属特別支援学校と専攻との連携を推進し、附属特別支援学校の教員の資質向上に協力する。
・県内を中心に地域の特別支援教育、特に学校現場の発達障害児支援の推進を図る。

計画

①附属特別支援学校内の発達障害支援センターと連絡を取り合い、文科省から委嘱されている「附属学校間連携、及び、地域における附属特別支援学校のセンター的機能の発揮」に関するプロジェクト研究に積極的に参画する。
②教育実習、教育実践フィールド研究の実践を通じ、附属特別支援学校の管理職、教員と連携を深め、これらの機会を活用して、附属特別支援学校の教員の資質向上の一助となるよう、主任等との連絡連携を密にし、よりよい連携を築く。
③特別支援教育コーディネーター実地教育を附属特別支援学校の地域連携室で行い、徳島市教育委員会の協力を得て、市内通級指導教室教員や幼稚園の特別支援学級教員の見学会を実施し、その資質向上を図る。
④県教育委員会(徳島県と兵庫県)との連携として特別支援教育推進事業の専門家チームの委嘱を継続して受け、各県の事業における教育相談や学校支援に携わり、大学人としての地域貢献に努める。
⑤徳島市内の通級指導教室担当教諭を中心に隔月に実施している勉強会を、対象を近県にも広げ、今後も継続する。当養成分野を終了した特別支援教育コーディネーターにも勉強会を開放し、修了生のフォローアップに努める。

2. 点検・評価

①附属特別支援学校内の発達障害支援センターと連絡を取り合い、文科省から委嘱されている「附属学校間連携、及び、地域における附属特別支援学校のセンター的機能の発揮」に関するプロジェクト研究に連携を密にとることができ、積極的に参画した。特に附属支援学校のセンター的機能の充実に寄与した。
②教育実習、教育実践フィールド研究の実践を通じ、附属特別支援学校の管理職、教員と連携を深め、これらの機会を活用して、附属特別支援学校の教員の資質向上の一助となるよう、主任等との連絡連携を密にし、よりよい連携を築けるよう、校長・教頭・担当教員との連絡を取り合い、滞りがないよう進めた。
③特別支援教育コーディネーター実地教育を附属特別支援学校の地域連携室で行い、徳島市教育委員会の協力を得て、市内通級指導教室教員や幼稚園の特別支援学級教員の見学会を実施し、その資質向上を順調に諮った。
④県教育委員会(徳島県と兵庫県)との連携として特別支援教育推進事業の専門家チームの委嘱を継続して受け、各県の事業における教育相談や学校支援に携わり、大学人としての地域貢献に努めた。本学のアドバイザー派遣事業には、昨年に引き続き、他県からの要請にも応じ、年間10件の枠一杯に協力した。
⑤徳島市内の通級指導教室担当教諭を中心に隔月に実施している勉強会を、対象を近県にも広げ、開催している。参加者数が増え、毎回、20人以上の参加者がいる。当養成分野を終了した特別支援教育コーディネーターにも勉強会を開放し、修了生のフォローアップに努めている。
⑥県立聾学校の学校評議員、県立国府支援学校の学校関係者委員を努めた。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

附属支援学校の研究大会において基調講演をしたり、校長と常にコミュニケーションを取るよう心がけ、専攻との連携を維持するべく努めた。
国内の大学がすでに取り組み始めている「発達障害学生支援」に一步踏み出せたことは、大学全体に関わることでもあり、今年度の総合的貢献と考えている。